科目区分，授業科目名　教職科目Ａ・国語科教育法
担当教員：中西淳

「国語科教育法Ⅳ」の授業の検討

国語科教育講座　中西　淳

Ⅰ　授業の概要

本授業は、国語科の授業理論（中学校・高等学校対象）の理解を深めていくところにその目的がある。１５回の授業展開は以下の通りである。

１．国語科学習指導の現状と課題
２．国語科実践研究の方法
３．国語科学習指導実践の構想
（１）　話すこと・聞くことの学習指導①
（２）　書くことの学習指導①
（３）　読むことの学習指導①
（４）　言語事項の学習指導①
（５）　古典の学習指導①
（６）　学習指導要領の国際比較①
（７）　話すこと・聞くことの学習指導②
（８）　書くことの学習指導②
（９）　読むことの学習指導②
（10）　言語事項の学習指導②
（11）　古典の学習指導②
（12）　学習指導要領の国際比較②
４．まとめ

国語科教育法Ⅰは、国語科教育の基本的事項の知識獲得というところに目標がある。国語科教育法Ⅳは、現場に生きて働く実践力の養成というところを意識している。

Ⅱ　授業の工夫点とその様相

授業の工夫点は次の通りである。

（１）問題意識の喚起

「国語科学習指導の現状と課題」において、教育実習を振り返りながら（それを行っていない者は自分が受けた授業を振り返りながら）、国語教育の問題点を考えさせた。自分で考えたい問題を具体的に捉えさせるためである。

（２）学習共同体の構成

それらの問題解決の方法をグループを形成し探らせた。近年の学校現場では、共同で研究を行っていくことが多くなっている。それに対応できるようにするためである。

（３）学習記録の作成

グループ発表をさせると、他のグループを真剣に聞かないということがしばしばおこる。学習内容を確かにするとともに、「聞く力」を育てるということを念頭に、学習記録を作成させた。

（４）全体評価と個人評価

レポートは「グループ」と「個人」で提出させた。以前アンケートをとった際に、個人の評価をきちんとしてほしいという要望があったからである。

（５）国際的視野の形成

今回は、発表の枠組みに「学習指導要領の国際比較」を新たに取り入れた。国際的視野から国語教育を考えていくことができるようにするためである。

（６）発表協議での支援

学校現場もそうであるが、授業協議の展開には多くの困難が伴う。協議する力の育成も念頭に、展開の仕方、質問の仕方等に関する支援も具体的に行った。

最終的な各グループの発表テーマは次のようになった。

○中学校における聞く力に焦点をあてた授業の構想
○『書くこと』への抵抗を減らし、達成感を得させる授業の実践
○吟味・評価しながら読む力を培うための学習指導構想
○気づきのある文法指導の構想―動詞の活用を中心に―
○古典の面白さを生徒に感じてもらえる授業とは―「児のそら寝」を入門教材として―
○カナダオンタリオ州における学習指導要領の分析と考察

授業における発表と協議は活発であった。さらにレポートは、全体的に質の高い

ものであった。例えば、十分読みこなしてとはいえないが、毎回のように参考文献を用いながら自分の考えを深めようとしている者が見られた。さらに、学んだことを「○問題意識をしっかりと持っておくことが第一条件○育てたい力を焦点化すること○これまで行われていることを整理すること○学習の意義を論理的に述べることができること○学習者の視点に立った授業作りをすること」という経験則にまとめている者も見られた。さらに、カナダの国語教育観（「literacy as freedom」の概念）に刺激を受け、我が国のそれを捉え直してみる者も見られた。

Ⅲ　アンケート調査の分析

最後の時間（実際には１４回目）に、授業改善をはかるためのアンケートを採った。それは、今後取り扱ってみたい問題と、授業展開の改善点に関するものである。

今後取り扱ってみたい問題は次のようなことが書かれていた。

「音読指導」「他国の国語科学習指導要領」「文章の『内容読解』をより理解できる方法」「日本における国語教育の歴史」「日記指導」「現場の教員や研究会で抱えている問題や実情について」「比較読み」「音読の意義」「小説と評論のそれぞれの指導のあり方」「書けない子だけでなく書ける子への指導」「日本のPISA の読解力に関する学力調査の結果の原因」「書くと話すとの関係性」「試験の作り方。例えば、到達度がよくわかるテスト、理解しているかどうかのテストなど。」「カナダのような他国の国語科との比較をしてみたい。そこから見えてくる課題についても考えたい。」

授業の方法や内容については、これまでのやり方でよいという意見が多かった。具体的には次のようなものである。

「発表２回というのは最後のまとめまでに多くの意見を得られて良かったと思います。最初は手探りで方向性が定まるまでに時間もかかってしまいましたが、発表のやりとりのなかでⅠ、Ⅱ、Ⅲの内容も振り返ることができ、より定着できたのではと思います。」「グルーピングして興味を持ったことに関して話し合い意見をしていくという機会を持てたことは大きかった。またそれを発表し、一人では見えてこなかったことに気づくことも出来、これまで受けたどの授業よりも濃いものになった。」「今の形でよいと思う。」「グループで活動は他者の考えと自分の考えを照らしあわせて考えられるのでよいと感じる」「グループで調べるので個人でやるよりも様々な意見が出てよかった。」「グループに分かれて２回ずつ発表し最終的に冊子にするという流れはこのままでいいと思う。」「今のままで特に問題はないです。」「分野は絞らずに今回のように幅広く自由に扱っていってよかったと思う。」

ただし、次のような、授業形態、授業展開、グループ編成に関する問題点も指摘された。

「今回のような形で良いと思うが、発言しない人もいるので、もう少し、皆の意見が聞けるような形に工夫できたらさらに良いと思う。」「グループの中における課題意識のズレが大きい。」「学部が違うと時間を調整するのが大変だった。」「個人レポートを授業の最後に書くようにしても良かったのでは。」「個人で課題に取り組む方がよかったと思う。」

Ⅳ　まとめ

授業の様子（発表と協議）やレポート、さらにアンケートを見る限り、来年度も同様の展開で進めるのがよいと思われる。ただし、改善点として指摘されたことは何からかの形で次回に反映させていきたい。なお、今回のカナダオンタリオ州の国語教育との比較は来年も試みてみたい。

国語科教育法Ⅰもそうであるが、近年、受講生がかなり増えてきている。これ以上増えるようであれば、今の授業形態は成立しなくなる。これに関しては、来年度の様子を見るしかない。増えた場合どのようにするかは今後の課題としておきたい。